

トピックス

「Just a walk in the park」～オランダ留学から10年～

奥羽大学口腔衛生学講座 南 健太郎

一般的に、西欧にある国オランダのイメージにはどんなものがあるだろうか。風車、海拔よりも低い国、平均身長が世界一高い国など、色々あるであろう。私は2007年にオランダの首都アムステルダムから北へ250キロのフローニンゲン州にあるフローニンゲン大学に1年間留学した。この大学はオランダでも2番目に古い歴史ある大学であり、多くの学生が学問に励んでいる。私の専門とする研究分野は「歯質再石灰化」である。その研究分野の本場がヨーロッパであり、そしてオランダであった。そのため、さらなる研究の研鑽のために留学を志した。いや、そういえば聞こえはよいが今となっては、ただ「世界」を見たかった。という単純な理由だった気がする。今年は帰国してからちょうど10年になる。その節目として、私の留学体験をご紹介したいと思う。

留学する前、私は海外の研究者と対等にディスカッションするにはヒアリングが重要であると考え、毎日仕事が終わるとすぐに英会話教室に行き英会話に励んだ。もちろん英会話だけでなくラジオ講座、CD、DVD、書籍と様々な方法を試した。私は留学が決まるまでの1年半、これらを継続した。それが正しい方法だったか分からないが、少しは役に立ったと思う。会話とは自分の意思を相手に伝えるツールである。このツールを鍛えておくことは、実際に海外に行ってみて非常に重要であると感じたものである。

いよいよ留学が決まり、私は成田空港からアムステルダム空港まで航空機で11時間、空港から電車で2時間半のフローニンゲン駅に到着した時は、すでに夜9時を過ぎていた。明日からの留学生活に胸が高鳴り、なかなか寝付けなかった記憶がある。

フローニンゲン大学では基礎系の講座に所属し、最初の1か月は付属病院、学生実習の見学を行った。オランダの歯学部学生は積極的に実習を行っており、実習内容を私に英語で説明してくれる学生までいたのには驚いた。オランダにおける歯科医師の教育期間は5年間で、日本より1年少なく、

そして歯科医師数は日本と違いそれほど多くはないとのことであった。

平日は朝から晩まで研究漬けであった。しかし、ある日、私を指導してくれたエンジニアにその行為をたしなめられた。彼が言うには、このインターネットが発達した現代において、研究だけのためにわざわざオランダまで来る必要はない。日本で研究を行うことは十分に可能である。オランダでしかできないことをもっと学んでほしい。といった理由からである。郷に入れば郷に従えという諺もある。私はそれまで、たまにしか参加しなかった研究の合間のコーヒータイトムや、月に1回行われる基礎系講座のレクリエーションにも積極的に参加した。そのかいあってか、多くのスタッフと交流することができ、研究についても多くのアドバイスを頂くことができた。たまにそのエンジニアと研究方針をめぐって、怒鳴りあいのディスカッション？をしたのも今となっては良い思い出である。

私の好きな英語のフレーズに触れたいと思う。そのフレーズは「Just a walk in the park」である。直訳すれば「公園の散歩」となるが、実際の意味あいは「そんなことは朝飯前！」ということになるであろうか。海外での生活は、時に困難な状況に陥ることがある。そのような時、私は一呼吸おいて「Just a walk in the park!」とつぶやくと、不思議なことに混乱していた頭の中が整理され、問題に対して冷静な対処をしていた。このフレーズは私にとって魔法の言葉だったかもしれない。

最後に、私は若い研究者にぜひ留学してほしいと思う。そして、ぜひ「世界」を見て来てほしいと思う。必ず自分の人生にプラスになるはずである。私は今年度に奥羽大学に着任したばかりである。次はここ奥羽大学でどんな「世界」を見て、どんな「世界」を作っていくであろうか。留学でオランダに行った時と同様に胸が高鳴り、これからの人生も楽しみである。

この記事を読んで、本学の若い研究者がいつかは自分もと留学を志して頂けたら幸いである。